

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月27日現在

機関番号：32506

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15H03139

研究課題名(和文) 東アジアにおける歴史人口データベースを利用した人口・家族の比較研究

研究課題名(英文) Comparative Study of Population and Family in East Asia Using Historical Panel Databases

研究代表者

黒須 里美 (Kurosu, Satomi)

麗澤大学・外国語学部・教授

研究者番号：20225296

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 7,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は東アジアで開発の進む歴史人口データベース(1700-1945年)を駆使し、人口学的行動(出生・死亡・結婚・養子・移動など)と世帯経済や同居親族とのつながりに実証的に迫った。日本、中国、台湾、韓国の歴史人口における家族とライフコースの類似性ととも、家族システムの違いによる相違性を明らかにした。また日本における歴史人口データベースの拡充と構築プロセスの効率化を飛躍的に前進させた。過去と現在をつなぐ視点を持った歴史人口Big Dataを利用した東アジア発信の歴史人口学のスタートと言える。

研究成果の学術的意義や社会的意義

東アジアの歴史人口における家族とライフコースの類似性と相違性を、歴史人口データベースを活用した人口学的行動の分析によって実証的に明らかにした先駆的研究である。東アジア社会における家族システムの相違を明らかにしたとともに、これまで西欧社会が中心となっていた歴史人口学の枠組みではとらえられない世帯や親族の重要性という新しい視点を示すことができた。また本研究の過去と現在をつなぐアプローチや東アジアの歴史人口における類似性の発見は、超少子高齢化が進む現代の東アジア社会の理解にも大いに示唆を与える。

研究成果の概要(英文)：Based on comparable panel datasets of household registers from Japan, China, Taiwan, and Korea during 1700-1945, we analyzed how demographic behaviors, including birth, death, marriage, adoption and migration, were shaped by household socioeconomic status and co-resident kin in historical East Asia. We found similarities as well as variations characterized by different family systems and practices between these populations. Efforts were also made to expand the panel datasets. We achieved a substantial improvement for microdata construction of Japanese historical population. Overall, this research project contributes to a systematic understanding of family dynamics and individual life courses of premodern East Asia from a longitudinal comparative perspective. It also provides insights in understanding the low fertility in contemporary East Asia by linking past to present.

研究分野：社会学、歴史人口学

キーワード：東アジア 歴史人口学 多世代パネルデータ イベントヒストリー分析 宗門人別改帳 ライフコース 家族 歴史人口Big Data

## 1. 研究開始当初の背景

近年、情報技術の進歩と学際的・国際的研究者の連携により、歴史人口資料をデータベース化して活用した比較研究が発展してきた。従来のクロス集計などの記述的統計や生命表分析に留まっていた歴史人口学研究から、イベント生起の要因分析という、庶民のライフコースの規定要因としての村落・コミュニティや世帯の社会経済状況を明らかにした画期的な国際比較研究(ユーラシアプロジェクト、EAP)に取り組む機会を得た研究代表者と協力者は、そこで得た経験と知見を東アジア社会の比較研究に活用できると考えた。家族の継承を重んじる東アジアの文化的特徴と世帯をベースとした戸籍型という共通点を持つ歴史人口データベースには、西欧社会では検証できない数多のリサーチ課題の検証の可能性がある。

20年に及ぶEAPの共同研究から派生する形で協力体制が築き上げられた日本、中国、台湾、韓国を含めた東アジアの歴史人口学研究者のネットワークと親族・世帯をめぐる研究関心、また日本においては、代表者と研究協力者が参加した文部省科学研究費創成的基礎研究(平成7-11年)「ユーラシア社会の人口・家族構造比較史研究」(速水融代表)で収集整理された膨大な徳川期人口経済資料と、史料整理・入力・データベース構築の方法論が本研究の機動力である。

## 2. 研究の目的

本研究は、東アジアで開発の進む歴史人口データベースを用い、近代以前の東アジアの比較研究と、日本の近世～近代移行期の人口・家族構造を明らかにするという目的で、3つの目標を掲げる。第1に、東アジアに特徴的な戸籍型の多世代パネルデータを活用し、18～20世紀初頭の東アジア社会における人口の特徴を比較的・長期的視野から実証的に研究する。第2に、第1の比較研究のために様々な地域と年代の資料を加えてデータベースを拡充するとともに、日本全国を俯瞰しうる、近世から幕末明治期の人口・家族基礎統計の作成をめざす。第3に、過去と現代をつなぐ視点で戦前の日本統治時代の台湾における日本人居住地域の人口動態から、人口転換期にあたる戦前日本人口分析の可能性を探る。

## 3. 研究の方法

平成27年より4年間の研究期間を予定し、研究目的にあげた(1)東アジアの歴史人口データを利用した人口と家族の比較分析、(2)近世から近代移行期日本のデータベース拡充と基礎人口統計の作成、(3)戦前台湾における日本人移民人口の分析、という3つに関する作業を並行して行う。(1)については4カ国5つのデータ(日本は二本松藩人別改帳1716-1870年、中国は戸口冊1749-1909年遼寧省と1866-1971年黒竜江省、台湾は日本統治時代の戸籍・8地域1906-1945年、韓国は李朝時代の戸籍・丹東地域1678-1888年)を利用した。5つのデータベースのオリジナル史料(人別改帳・戸口冊・戸籍)が作成された経緯と目的は違うがどれもが近代センサスに匹敵する静態情報と動態情報を有する。世帯を単位とした多世代にわたる長期ミクロ資料であり、世帯員の年齢、続柄、イベント(出生・死亡・結婚・移動)、社会経済的地位などが判別するという、究極のパネルデータである。それぞれのデータベース構築にも関わった本科研の海外研究協力者との連携で同じテーマで分析を進める方法と、これらのデータベースを統合して同じモデルのイベントヒストリー分析を進める方法をとる。データの詳細度が最も優れている日本についてはさらにデータ地域を増やし、町村、地域、時代という比較軸での分析を試みる。(2)については麗澤大学人口・家族史研究プロジェクト(PFHP)所蔵の資料整理とデジタル化でデータベース拡充を図るとともに、データレビューを行い、約200町村の宗門・人別

改帳の基礎人口経済統計を作成する。(3)は日本からの官営移民が移住した旧吉野村(花蓮県)(1910-45年)などの情報を中心に、戦前の台湾人口と日本人移民人口の比較を試みる。

#### 4. 研究成果

(1) 東アジアの歴史人口データを利用した人口と家族の比較研究：西欧における歴史人口との比較において、近代以前の東アジア人口における特徴として、低出生力、男児選好、養子慣行、招婿婚、同居家族や親族の影響、家系・世帯の継承の重要性などが挙げられる。これらの特徴を実証的に探るべく、歴史人口データベースを利用した研究を展開した。ここでは東アジアの比較という視点からの親族構造と移動(逃散)死亡、男児選好、養子、日本における結婚形態と性別選好、近世の町場と農村の比較、さらに近世と現代の比較として結婚・離婚の研究など、主に国際学会や査読付学術雑誌において評価された成果を中心にまとめる。

東アジアの比較：前近代の東アジア社会において、歴史的・経済的・制度的背景は全く違うにも関わらず、様々な人口学的行動に対する同居親族の影響や男女の違いが大きいという点で共通することが明らかになった。例えば移動のうちの逃散・欠落(Dong, Campbell, Kurosu, Lee 2015)のリスクはどの社会においても世帯に扶養する子どもや高齢者がいることで低い。男児(1-9歳)の死亡のイベントヒストリー分析(Dong, Manfredini, Kurosu, Lee 2016)からは同居する親がいない場合に40-76%も死亡リスクが高くなった。また出生順位別にみると、親の不在は特に第一子において影響が強い。長子相続の日本社会でも、分割相続ながら長男が系譜の中で重要視される中国社会においても、親の長男への投資が大きいということであり、家族制度と人口の重要な関係が示唆された。

家族制度と人口との関係として重要である「養子」慣行についても内外の学会においてセッションを企画し比較研究を試みた(2018年日本人口学会、2018年World Economic History Congress)。比較研究から明らかになったのは、まず、低出生力の東アジア社会に、長男(または子ども)がいないという人口学的制約はつきものであり、養子は重要な代替措置であったことである。しかし誰を養子にするかについては日本、中国、韓国で親族関係や空間的距離の違いがあった。婿養子についてはそれを結婚と捉えるか、養子慣行と捉えるかが議論となった。台湾では招婿婚として低階層からの婿や地域による違いが指摘された(Li et al. 2019)。日本の場合も普通養子、婿養子、夫婦養子などの定義を見直し、男女、年齢、結婚の有無など人口学的指標で見直したところ、従来の研究には扱われなかった女子を含む子どもの養子の存在を明らかにすることができた。このような前近代東アジア社会の低出生力や、「子どもの福祉より家の継承のための養子」という特徴は現代の東アジア社会にも通ずることである。

日本：東アジアの比較研究で見た家族制度と人口とのつながりのメカニズムを理解するために結婚形態と出生の関係を探るべく二本松藩2農村(福島県郡山周辺)のデータから10-49歳既婚女性13,888人年(1,045人)を抽出し、嫁取婚(virilocal marriage)と婿取婚(uxorilocal marriage)における初婚年齢と、出生順性比(男/女)を見た(Dong and Kurosu 2017, Table 1)。

Table 1. Reproductive age patterns and male-to-female sex ratio of recorded births by parity in virilocal and uxorilocal families

Marital residence	Wife's age		First birth		Second birth		Third and later births	
	First marriage	First birth	Sex ratio	N	Sex ratio	N	Sex ratio	N
Virilocal	15.5	19.9	94.0	487	123.3	364	109.0	489
Uxorilocal	13.9	19.1	68.1	190	116.4	132	109.9	170

早婚であるこの地域の婿取婚は嫁取婚よりも若干初婚年齢が低だけでなく、記録された第

一子の性比は68と異常に低い。一般的に出生性比は105前後とされるため、どちらの結婚スタイルでも性比は低いが婿取婚でそれが際立っていることがわかった。第二子、第三子以上では正常化されていく。婿取婚においてより第一子の女兒選好の傾向が強いことは世帯経済や同居家族などの要因も含めたイベントヒストリー分析でもサポートされた。この結果は他の東アジア社会では見られない傾向であり、双系的な日本家族特有の戦略を示唆している。

この他、日本のデータでこそ得られる貴重な情報を利用した研究として、同地域の町村を比較した結婚(Kurosu, Takahashi, Dong 2017)や移動(黒須・高橋・長岡 2017)の研究が挙げられる。町村の婚姻圏や労働市場の大きさの違いを可視化するとともに、直系家族的な人口行動パターンの共通性を明らかにした。さらに、多世代パネルデータを利用したもう一つの独創的な成果として結婚と離婚についての長期比較研究が挙げられる(Tsuya and Kurosu 2019; Kurosu and Kato 2018)。具体的には二本松藩データと現代日本のサーベイデータを利用し、社会経済状況、世帯経済、同居親族などが結婚と離婚リスクにどう影響するかをイベントヒストリー分析によって比較した。特に離婚においては、社会の経済状況が悪化するほど、また世帯経済の水準が低いほど、離婚リスクが高いこと、妻方同居の方が夫方同居よりも離婚リスクが高いこと、子どもの存在は離婚リスクを大きく低下させることなど、時代を超えた共通点が数多発見された。

(2) 近世から近代移行期日本のデータベース拡充と基礎人口統計の作成：成果として データベースの拡充、データレビュー、基礎人口統計の作成を中心にまとめる。

データベースの拡充：麗澤大学人口・家族史研究プロジェクト室(PFHP)においてPFHP所蔵資料を中心に、未入力資料の整理と入力、既入力情報のデータチェックとクリーニングなどを行った。これにはオリジナル史料である各年の宗門・人別改帳を読み下し、連続した個人と家族の時系列的情報として整理するBDS(基礎整理シート)作成と、特殊な入力プログラムに熟練したスタッフの協力を得た。全国50町村のデジタル資料について戸主からの続柄と移動イベントを中心にコード化を進めつつ、町村・世帯・個人情報と照合したデータベース化を図った。この他、新たに長期に継続する良質なデータである二本松藩の3ヶ村(岩代国安達郡・安積郡)の入力とBDS作成、また二本松藩への移動が多い越後国頸城郡を中心とした約40ヶ村情報の記号化と内25ヶ村の入力とチェックを進めた。これらは終わりのない地道な作業であるが、入力からCSVファイル作成、CSVからSTATAプログラムによるファイル照合と基礎変数の作成という効率化を図った。すでに中国多世代パネルデータ(CMGPD)の公開に成功しているCampbell & Dong氏の実質的な協力が得られたことで、これまでの日本の歴史人口学データ構築の方法に縛られない歴史人口Big Data構築の可能性を提示できた。

データレビュー：歴史人口Big Data活用のステップとして重要なのがデータレビューである。研究代表者と海外協力者は東アジアの歴史人口学に利用されるデータレビューをすることで、東アジアデータの特長を明らかにした(Dong, Campbell, Kurosu, Yang, and Lee 2015)。このアプローチを用い、の全国50町村について、分析前のデータレビューをスタートした。これまでの日本の歴史人口学では1-2ヶ村を対象とした研究が主流であったため、このアプローチは斬新である。図1は50町村(右軸)の資料に登場する約10万人(左軸)の情報をまとめたものである。1670年から幕末までの200年間のオブザベーションを示したものである。現在把握できるデータではやはり18世紀後半からの情報が多いことが可視化された。長くは8世代も継続するデータから、親族関係とその人口への影響についての多世代分析が可能であることがわかった。1-2ヶ村を対象とした研究ではサンプル数が少ないためにできなかった統計的なアプローチも可能であることを示すことができた。

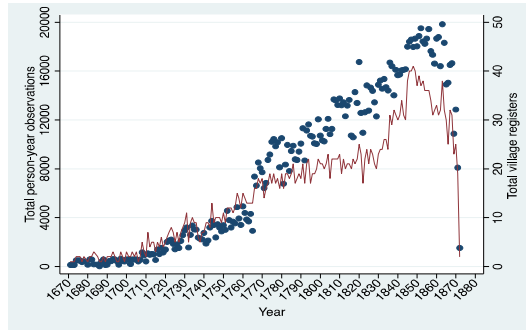


図1 50町村の人・年 (person-years)の分布: 1670–1870年  
(実線が宗門人別帳数、ドットが人年)

基礎人口統計の作成: 研究協力者の高橋美由紀氏とともに麗澤アーカイブズ・人口経済統計資料のカバーする町村を整理し、日本全国を俯瞰しうる、近世から幕末明治期の人口・家族基礎統計の作成を行った。データには であげた町村、川口洋氏が開発した歴史人口地理情報システム (DANJURO) の町村、さらに PFHP 所蔵の刊本から得られる人口・世帯情報をまとめ、指標として人口の推移と世帯規模の推移を示した。これによって人口・世帯規模の推移と地域的な差異、都市と農村の違いなどが明らかになり、飢饉の影響やそれに対する政策の違い、自然増加と社会増加の影響などが議論された。この成果は「近世日本の人口と気候」として近刊予定である。

(3) 戦前台湾の日本人居住地区の人口学的分析: 日本統治時代に作成された台湾の資料からは日本の歴史人口学の空白の時代である幕末以降 20 世紀初頭についての貴重な情報が得られる。1900 年代の日本は人口圧が高くなり、農村における土地不足と貧困が問題になっていたが、その解決策として台湾への移民策が推進された。移民になるための条件は厳しく、経済的基盤を持つ健康な農業従事者に限られたものの、日本全国から多様な年齢グループや家族での移動があった (1918 年台湾総督府官営移民事業報告書)。例えば官営移民がはじめて移り住んだ花蓮県旧吉野村への移民は福岡県から 140 世帯と高く、熊本県、徳島県が 90 世帯ほどでそれに続いた。6-15 歳人口が突出して多かった。このように移民人口分析には、年齢・性別や出身地域の選択性に注意が必要である。全体としてみると、1900 年代初頭は台湾人の平均死亡年は 26 歳、日本人移民は 24 歳と低く、乳児死亡率は両者とも 160 パーミル前後であるが、日本人移民の方が高かった (Taiwan Statistical Abstract for the Past Fifty One Year 1895-1945)。移住当初は栄養不良や過剰労働による死亡、また慣れない地でのマラリアなどを含めた風土病や伝染病が指摘される。しかし、平均死亡年齢も乳児死亡率も 1920 年あたりには逆転する。1942 年の平均死亡年は台湾人が 26 歳、日本人移民は 36 歳、乳児死亡率は台湾人で 130、日本人移民は 40 パーミルにまで下がった。この変化はまさに日本の人口転換と共通する新しい発見である。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 26 件)

黒須里美 2018 「国際比較と歴史に見る日本の家族・世帯」(論考)『統計』4月号: 33-39 日本統計協会 (査読無)

Dong, Hao, Matteo Manfredini, Satomi Kurosu, Wenshan Yang, and James Z. Lee 2017 “Kin and Birth Order Effects on Male Child Mortality: Three East Asian Populations, 1716-1945.” *Evolution and Human Behavior* 38(2): 208-216 DOI: <http://dx.doi.org/10.1016/j.evolhumbehav.2016.10.001> (査読有)

Dong, Hao and Satomi Kurosu 2017 “Postmarital Residence and Child Sex Selection: Evidence from Northeastern Japan, 1716-1870.” *Demographic Research* 37: 1383-1412 (査読有)

Kurosu, Satomi, Miyuki Takahashi, and Hao Dong 2017 “Marriage, Household

Context and Socioeconomic Differentials: Evidence from a Northeastern Town in Japan, 1716-1870.” *Essays in Economic and Business History* 35(1): 239-263

( 査読有 )

黒須里美・高橋美由紀・長岡篤 2017 『『ザビエルデータ』から復元する移動ヒストリー～近世庶民の人口移動研究資料～』『言語と文明』15: 139-150 ( 査読無 )

Dong, Hao, Cameron Campbell, Satomi Kurosu and James Z. Lee 2015 “Household Context and Individual Departure: The Case of Escape in Three ‘Unfree’ East Asian Populations, 1700-1900.” *Chinese Journal of Sociology* 1(4): 515-539 DOI:10.1177/2057150X15614547 ( 査読有 )

Dong, Hao, Cameron Campbell, Satomi Kurosu, Wenshan Yang, and James Z. Lee 2015 “New Sources for Comparative Social Science: Historical Population Panel Data from East Asia.” *Demography* 52(3): 1061-1088 DOI: 10.1007/s13524-015-0397-y ( 査読有 )

〔学会発表〕(計 42 件)

Kurosu, Satomi and Hao Dong 2018 “Adoption in early modern Japan: Evidence from population registration microdata, 1708-1870?” XVIII World Economic History Congress, July 29-August 3, MIT, Cambridge/Boston

Kurosu, Satomi and Akihiko Kato 2018 “Family or Individual Matters? Female Status and 300 Years of Divorce in Japan” ISA (International Sociological Association) RC06-41 Conference, May 16-20, Singapore

Kurosu, Satomi and Miyuki Takahashi 2015 “Mortality as Demographic Response to Famines and Short-Term Economic Crisis in a Town in Northeastern Japan, 1729-1870” Social Science History Association November 12-15, Baltimore

〔図書〕(計 23 件)

高橋美由紀・黒須里美 2019 (近刊) 『近世日本の人口と気候』(第3章) 『第5巻 気候変動から近世をみなおすー数量・システム・技術(仮)』臨川書店

Campbell, Cameron and Satomi Kurosu 2017 “Asian Historical Demography” pp.45-53 in Zhongwei Zhao and Adrian Hayes (eds.) *Handbook of Asian Demography*. Routledge ( 査読有 )

〔その他〕(計 11 件)

Tsuya, Noriko O. and Satomi Kurosu. 2019. “Patterns and Factors of First Marriage: A Comparative Analysis of Early Modern and Contemporary Japan.” *Keio IES Discussion Paper Series* 2019-012

Li, Chun-Hao, Martin Kolk, Wen-Shan Yang, Ying-Chang Chuang 2019 “Uxorilocal Marriage as a Strategy for Heirship in a Patrilineal Society: Evidence from Household Registers in Early 20<sup>th</sup>-Century Taiwan.” *Stockholm Research Reports in Demography* no. 2019:05

## 6 . 研究組織

(1)研究分担者 なし

(2)研究協力者

研究協力者氏名：キャンベル キャメロン

ローマ字氏名：(CAMPBELL, Cameron)

研究協力者氏名：董 浩

ローマ字氏名：(DONG, Hao)

研究協力者氏名：川口洋

ローマ字氏名：(KAWAGUCHI, Hiroshi)

研究協力者氏名：リー サングック

ローマ字氏名：(Lee, Sangkuk)

研究協力者氏名：中里 英樹

ローマ字氏名：(NAKAZATO, Hideki)

研究協力者氏名：高橋 美由紀

ローマ字氏名：(TAKAHASHI, Miyuki)

研究協力者氏名：津谷 典子

ローマ字氏名：(TSUYA, Noriko)

研究協力者氏名：楊 文山

ローマ字氏名：(YANG, Wen-Shan)